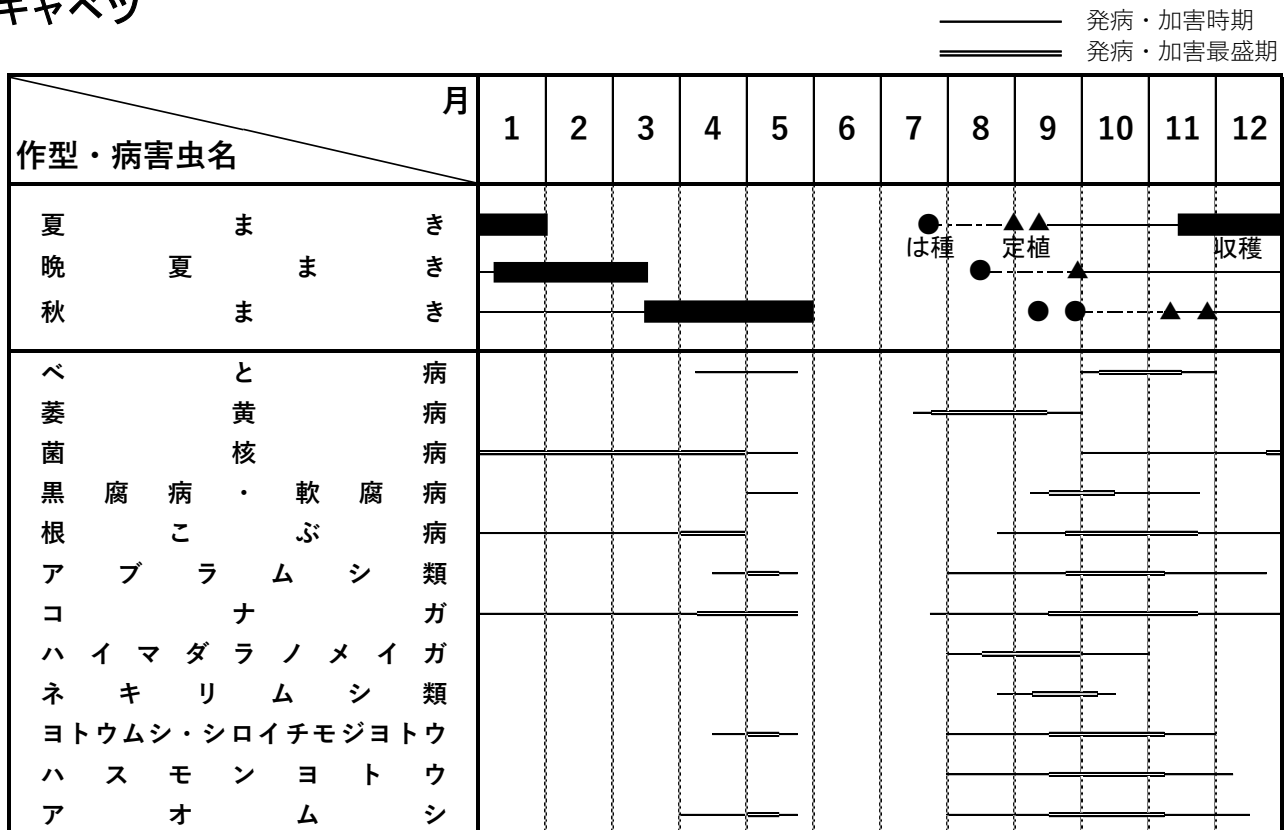


キャベツ



べと病

留意事項

- 1 低温・多雨での発生が多い。
- 2 QoI剤<11>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 3 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、リドミルゴールドMZに含まれる成分マンゼブの総使用回数は、3回以内なので注意する。
- 4 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、リドミルゴールドMZはかぶれやすいので注意する。

防除方法

- 1 排水を良好にし、密植を避ける。
- 2 窒素質肥料の多用を避ける。
- 3 被害葉は速やかに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) <M3> 【400～600倍 30日／3回】
 - ・ [ゾーベックエンテクタSE](#) <21> <49> 【3000倍 7日／2回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) <M5> <40> 【1000倍 14日／2回】
 - ・ [リドミルゴールドMZ](#) <M3> <4> 【1000倍 30日／3回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

-
- ・ [メジャーフロアブル](#) ≪ 1 1 ≫ 【2000倍 3日／3回】

萎黄病

留意事項

- 1 夏まきキャベツに発生が多い。
- 2 土壌温度27～30℃の時、発生が多い。

防除方法

- 1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
- 2 発病株を速やかに処分する。
- 3 耐病性品種（YR）を用いる。
- 4 苗床、本ぽを土壌消毒する。（**XⅢ**土壌消毒 参照）

菌核病

留意事項

- 1 菌核が土中に残って伝染源となるので、罹病株は放置せずほ場外へ持ち出す。
- 2 SDHI剤≪ 7 ≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 連作を避け、田畑輪換を図る。
- 2 なばなやレタスなど、本病が発生しやすい作物との輪作を避ける。
- 3 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [セイビアーフロアブル20](#) < 1 2 > 【1000倍 前日／3回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ベンレート水和剤](#) < 1 > 【2000倍 7日／6回】
 - ・ [アフェットフロアブル](#) ≪ 7 ≫ 【2000倍 前日／3回】
 - ・ [パレード20フロアブル](#) ≪ 7 ≫ 【2000～4000倍 前日／3回】
 - ・ [オンリーワンフロアブル](#) < 3 > 【1000～2000倍 前日／3回】

黒腐病

留意事項

- 1 種子・土壌伝染する。
- 2 9～10月の多雨で低温時に発生が多い。
- 3 薬剤散布は、特に台風や大雨、強風の直後に行うと効果が高い。

防除方法

- 1 無病種子を用いる。
- 2 あぶらな科野菜の連作を避ける。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 3 被害葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- 4 激発地では、定植時に下記の薬剤を施用する。
 - ・ [オリゼメート粒剤](#) <P 2>
 - 【6～9kg／10a 全面土壌混和または作条土壌混和 定植時／1回】
- 5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ヨネポン水和剤](#) <M 1> 【500倍 7日／5回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [カスミンボルドー](#)、[カッパーシン水和剤](#) <M 1> <2 4> 【1000倍 7日／4回】
 - ・ [アグリマイシン-100](#) <2 5> <4 1> 【2000倍 14日／2回】
 - ・ [バリダシン液剤5](#) <U 1 8> 【800倍 7日／5回】

軟腐病

留意事項

- 1 バイオキーパー水和剤は軟腐病菌の拮抗微生物を成分とする。
- 2 薬剤散布は、特に台風や大雨、強風の直後に行うと効果が高い。

防除方法

- 1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
- 2 過度の早植えは避ける。
- 3 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ヨネポン水和剤](#) <M 1> 【500倍 7日／5回】
 - ・ [バイオキーパー水和剤](#) <ー(生)>
 - 【野菜類（除かぼちゃ、ズッキーニ） 500～2000倍 発病前～発病初期／ー】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [カスミンボルドー](#)、[カッパーシン水和剤](#) <M 1> <2 4> 【1000倍 7日／4回】
 - ・ [スターナ水和剤](#) <3 1> 【1000倍 7日／3回】
 - ・ [バリダシン液剤5](#) <U 1 8> 【800倍 7日／5回】

根こぶ病

留意事項

- 1 土壌が乾燥している時に石灰窒素を施用した場合、分解促進のため、かん水を行う。
- 2 オラクル粉剤の成分アミスルブロムの総使用回数は8回以内（但し、苗床での土壌混和は2回以内、かん注は1回以内、本ぼでの土壌混和は2回以内、散布は4回以内）。但し、苗床及び本ぼでの土壌混和それぞれ2回のうち、それぞれ1回は、「おとり植物（葉だいこん、エンバク等）」を栽培する場合であり、その栽培前に土壌混和する場合に使用できる。「おとり植物」の生育期間（1ヶ月程度）及びすき込み後、腐熟させる期間（1ヶ月程度）において、2回目を施用する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 3 ランマンフロアブルの成分シアゾファミドの総使用回数は6回以内（但し、育苗期のかん注は1回以内、本ぼでの株元かん注は1回以内、散布は4回以内）。

防除方法

- 1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
- 2 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 3 石灰質肥料を施用して土壌酸度をpH6.5～7.2に矯正する。
- 4 石灰窒素（[石灰窒素50](#)【100～200kg／10a は種前または植付前／1回】など）を散布後土壌混和する。
- 5 過度の早植えは避ける。
- 6 発病した根は、ほ場から持ち出し、集めて処分する。
- 7 は種または、定植前に下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ネビリュウ](#) ＜36＞
 - 【20～30kg／10a 全面土壌混和 は種または定植前／2回】または
 - 【20kg／10a 作条土壌混和 定植前／2回】
 - ・ [ランマンフロアブル](#) ＜21＞
 - 【500倍 2L／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（30×60cm、使用土壌約2.5～7L） かん注 定植前日～当日／1回】
 - ・ [オラクル粉剤](#) ＜21＞
 - 【20kg／10a 全面土壌混和 は種前（苗床）／2回】または
 - 【20kg／10a 作条土壌混和 定植前／2回】または
 - 【30kg／10a 全面土壌混和 定植前／2回】
- 8 本ぼで下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ランマンフロアブル](#) ＜21＞【2000倍 株元かん注（250ml／株） 14日／1回】
- 9 苗床、本ぼを土壌消毒する。（ⅩⅢ土壌消毒 2土壌病害虫等を対象とした薬剤による土壌消毒（4） 参照）
 - ・ [バスアミド微粒剤](#)、[ガスタード微粒剤](#) [劇](#) ＜ー＞
 - 【20～30kg／10a は種または定植21日前／1回】

アブラムシ類

留意事項

- 1 苗床は寒冷しゃで被覆してアブラムシ類の飛来を防止する。
- 2 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は3回以内（但し、育苗期の株元散布、定植時の土壌混和及びかん注は合計1回以内、散布及び無人航空機散布は合計2回以内）。
- 3 プリロッソ粒剤オメガ、ベリマークSC、（コナガの項 参照）の成分シアントラニリプロールの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内）。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 4 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4 A>
【2g/株 株元散布 育苗期/1回】または
【2g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
- 2 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。
 - ・ [プリロッソ粒剤オメガ](#) <2 8>
【50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L） 本剤の所定量をセル成型育苗トレイまたはペーパーポットの上から均一に散布する 育苗期後半～定植当日/1回】
 - ・ [ベリマークSC](#) <2 8>
【400倍 0.5L/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L） かん注 育苗期後半～定植当日/1回】
 - ・ [アクタラ顆粒水溶剤](#) <4 A>
【100倍 0.5L/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（30×60cm・使用土壌約3～4L） かん注 育苗期後半/1回】
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [モスピラン顆粒水溶剤](#) 劇 <4 A> 【2000～4000倍 7日/5回】
 - ・ [コルト顆粒水和剤](#) <9 B> 【3000～4000倍 前日/3回】
 - ・ [トランスフォームフロアブル](#) <4 C> 【2000倍 前日/3回】

コナガ

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 2 幼虫による被害が著しいのは春と秋である。
- 3 あぶらな科野菜を加害するほかナズナ、イヌガラシ、スカシタゴボウなどのあぶらな科雑草にも寄生する。
- 4 セル成型苗では、定植前に粒剤を株元散布すると省力的に防除できる。
- 5 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は、3回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は2回以内）。
- 6 プリロッソ粒剤オメガ、ベリマークSCの成分シアントラニリプロールの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内）。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 フェロモンディスペンサーを利用する。3ha以上の集団産地では、コンフューザーV、コナガコンープラス、コナガコンを設置すると発生を抑制できる。
 - ・ [コンフューザーV](#)
【野菜類 100～200本／10a（41g／100本製剤） 対象作物の栽培全期間】
 - ・ [コナガコンープラス](#)
【コナガ、オオタバコガ、ヨトウガが加害する農作物等 100～120本／10a（22g／100本製剤） 対象作物の栽培全期間】
 - ・ [コナガコン](#)
【コナガ、オオタバコガが加害する農作物等 露地：100～110m／10a（100mリール）または200本／10a（20cmチューブ） 加害作物栽培の全期間】
- 2 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダントツ粒剤](#) < 4 A >
【0.5g／株 株元処理 育苗期後半／1回】または
【2g／株 植穴処理土壌混和 定植時／1回】
- 3 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。
 - ・ [プリロッソ粒剤オメガ](#) < 2 8 >
【50g／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L） 本剤の所定量をセル成型育苗トレイまたはペーパーポットの上から均一に散布する 育苗期後半～定植当日／1回】
 - ・ [ベリマークSC](#) < 2 8 >
【400倍 0.5L／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5L～4L） かん注 育苗期後半～定植当日／1回】
- 4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) < 6 > 【1000～2000倍 前日／3回】
 - ・ [グレース乳剤](#) < 3 0 > 【2000～3000倍 7日／2回】
 - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 < 1 3 > 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [ディアナSC](#) < 5 > 【2500～5000倍 前日／2回】
 - ・ [アクセルフロアブル](#) < 2 2 B > 【1000倍 前日／3回】
 - ・ [BT剤](#) < 1 1 A > （Ⅸ野菜類の病虫害防除 3野菜類 参照）

ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイ）

留意事項

- 1 だいこん等あぶらな科作物を加害する。
- 2 8～9月（育苗期～定植直後）の冬キャベツに被害が多い。
- 3 7～10月が高温少雨の年に多発する傾向がある。
- 4 食入前の防除に努める。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 5 アクタラ粒剤5の成分チアメトキサムの総使用回数は4回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は3回以内）。
- 6 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は3回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、定植後の散布は2回以内）。

防除方法

- 1 育苗中の苗は、寒冷しゃ等で被覆し、成虫の侵入を防ぐ。
- 2 定植には健全苗を使用し、本ぼへの幼虫の持ち込みを防ぐ。
- 3 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [アクタラ粒剤5](#) < 4 A >
【2g／株 株元散布 育苗期後半／1回】または
【2g／株 植穴処理 定植時／1回】
- 4 下記の薬剤を育苗時に、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) < 4 A >
【50～100倍 0.5L／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（30×60cm・使用土壌約3L） かん注 定植前日～定植時／1回】
 - ・ [ダントツ粒剤](#) < 4 A >
【50g／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（30×60cm、使用土壌約1.5～4L） 育苗期後半／1回】
 - ・ [プリロッソ粒剤オメガ](#) < 2 8 >
【50g／セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L） 本剤の所定量をセル成型育苗トレイまたはペーパーポットの上から均一に散布する 育苗期後半～定植当日／1回】
- 5 発生初期に、薬液が芯葉にかかるよう丁寧に散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) < 6 > 【1000～2000倍 前日／3回】
 - ・ [グレース乳剤](#) < 3 0 > 【2000～3000倍 7日／2回】
 - ・ [ディアナSC](#) < 5 > 【2500～5000倍 前日／2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) < U N > 【1000倍 7日／2回】
 - ・ [アクセルフロアブル](#) < 2 2 B > 【1000～2000倍 前日／3回】

ネキリムシ類

留意事項

- 1 ネキリムシ類とはカブラヤガ、タマナヤガ、シロモンヤガ、センモンヤガの幼虫の総称で、被害の大部分は、カブラヤガもしくはタマナヤガによる。

防除方法

- 1 被害を認めたら下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダイアジノン粒剤5](#) < 1 B >

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

【4～6kg/10a 全面土壌混和または作条土壌混和 は種時または定植時/2回】
または【6kg/10a 土壌表面散布 定植時/1回】

- ・ [フォース粒剤](#) 劇 <3 A> 【4kg/10a 全面土壌混和 定植時/1回】
- ・ [アクセルベイト](#) <2 2 B> 【3～6kg/10a 株元散布 7日/3回】
- ・ [デナポン5%ベイト](#) <1 A> 【3～6kg/10a 株元散布 14日/3回】

ヨトウムシ

留意事項

- 1 若齢幼虫の防除に重点を置く。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アディオン乳剤](#) <3 A> 【2000倍 3日/5回】
 - ・ [アフーム乳剤](#) <6> 【1000～2000倍 前日/3回】
 - ・ [ディアナSC](#) <5> 【2500～5000倍 前日/2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) <UN> 【1000倍 7日/2回】
 - ・ [BT剤](#) <1 1 A> (区野菜類の病害虫 3野菜類 参照)

ハスモンヨトウ

留意事項

- 1 若齢幼虫の防除に重点を置く。
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）にかん注処理する。
 - ・ [ベリマークSC](#) <2 8>

【400倍 0.5L/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L） 育苗期後半～定植当日/1回】
 - ・ [ジュリボフロアブル](#) <4 A> <2 8>

【200倍 0.5L/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L） 育苗期後半～定植当日/1回】
- 2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) <6> 【1000～2000倍 前日/3回】
 - ・ [グレーシア乳剤](#) <3 0> 【2000～3000倍 7日/2回】
 - ・ [プロフレアSC](#) <3 0> 【2000～4000倍 前日/3回】
 - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 <1 3> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) <UN> 【1000倍 7日/2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ B T 剤 < 1 1 A > (IX野菜類の病虫害 3野菜類 参照)

シロイチモジヨトウ

留意事項

- 1 若齢幼虫の防除に重点を置く。
- 2 コナガ、ハスモンヨトウなどと同時防除を行う。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 < 1 3 > 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [スピノエース顆粒水和剤](#) < 5 > 【2500倍～5000倍 3日／3回】
 - ・ B T 剤 < 1 1 A > (IX野菜類の病虫害 3野菜類 参照)

アオムシ

留意事項

- 1 幼虫による被害の著しいのは春と秋である。
- 2 アオムシに対する薬剤の効果は高いのでコナガ、ヨトウムシ類などと同時防除を行う。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [トレボン乳剤](#) < 3 A > 【1000～2000倍 3日／3回】
 - ・ [アファーム乳剤](#) < 6 > 【1000～2000倍 前日／3回】
 - ・ [グレースシア乳剤](#) < 3 0 > 【2000～3000倍 7日／2回】
 - ・ B T 剤 < 1 1 A > (IX野菜類の病虫害防除 3野菜類 参照)

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。